

野中 美希

(政策学部 政策学科 4 年次生)

福島を訪れて、まだ終わっていないということを強く感じた。震災を伝えよう、街をよりよく変えていこうとされている方々の想いを知ることができた。街には帰還困難区域として柵で閉ざされてしまった震災当時から変わらない様子や、山積みになったフレコンバッグ、放射線測定器があった。何気ない会話にも震災の話題がでて、心の面でも消えることはないと思えた。政治や経済の問題も絡み、人ごとではないと思った。

また課題からビジネスを創出するという取り組みで何事もポジティブに捉えて行動されていて、楽しいからこそ行動できると伺うこともできた。

実際に見て聞くことでわかることがあり、無知は罪であるという言葉が響いた。情報に溢れ、それぞれ守るものが違う中で、様々な意見や知識を知り、客観的に物事を捉え長期的に見て考える力が必要だと感じた。今後震災からさらに時が経ち、知らない世代も増える中で伝えるのは私たちの使命だと考える。



宿舎での夜ご飯。たくさんの品数で味付けも素材も毎食美味しかった

河合 政明

(文学部 仏教学科 3 年次生)

参加の目的は今の福島を見て、学び、それを伝えることです。

4 日間で多くの方々と話し合うことができ、私にとって今後の考え方が変わったきっかけにもなりました。除染された土が入ったフレコンバッグが町からなくなり、町に人が戻ってからの「復興した」と言いたいと思います。そのためには、日本全体での協力が必要ではないでしょうか。IT 社会が到来すると言われていますが、人間でしかできないことも残されています。私達が伝えることがより多くの人々の心に伝わることを願います。



南相馬市防災センターで当時の話を聴く様子

朝倉 勇人

(社会学部 現代福祉学科 3 年次生)

福島県を訪れて、津波による被害に加えて原子力発電所（以下、原発）の事故の影響が大きいと感じた。町中にあるフレコンバッグ、また居住できない原発周辺の地区をバスで通った時に、当時の生活の雰囲気を感じる家や建物がそのまま残っており時が止まっていた。

この福島スタディツアーで、震災によって失ったものやそこから未来に向かっての取り組みを、震災を経験した様々な立場の方から話を聴くことを通して、自分がどのように生きるかについて深く考えるきっかけになった。

今回で3度目の参加だが、町の景色に慣れてしまったことが怖いと感じた。

震災から約9年経ったが、オリンピックや万博等によって復興がおろそかにされている部分も感じた。インフラの整備を進めるだけが復興とは呼べないと思う。原発のことや災害について同じ日本で住んでいる私たち自身が今一度震災について知る必要があるであり、なによりも実際に現地を訪れて感じてほしいと思う。



消防署の2階に非常持ち出し品を展示していた。ここまで準備が必要だと初めて知った

大橋 寛海

(社会学部 現代福祉学科 3 年次生)

今回のスタディツアーで3回目となる福島への訪問。複数回福島に来ているからこそ分かるような意味での変化や福島の魅力ももっと見つけたい、というテーマで参加した。



阿部農園から今年ようやく運び出されるフレコンバッグの作業の様子

今年参加して一番良かったと思ったことは阿部農園ですずっと放置されていたフレコンバッグの山が遂に運び出されたということである。掘り起こされた場所には山砂が入れられるということで一概によかったとは言えないのかもしれないが、運び出される様子を見ることができて安心した。

福島を訪問して毎回思うのは、お話ししてくださる方々は本当に福島が好きなのだということである。

我々は勉強をしに行っているので震災のことを聞くのは当然ではあるものの、福島を被災地としてし

かとらえないのも間違いであると感じている。福島を被災地ではなく観光地として“スタディ”関係なしに旅行に行きたいと今回の参加で強く思った。これから福島に関わり続けることを大切にしていきたいと思う。

村上 大樹
(文学部 哲学科 2年次生)

今回スタディツアーに参加し、震災からの復興の現状や福島で暮らす人々の思いなど、これまで報道等で見聞きしていた以外のことを多く学んだ。

バリケードを張られ一歩先は立ち入り禁止となっている区域や、汚染土をいれたフレコンバッグが当たり前のように残っている現状を目の当たりにし、復興はまだまだ先の見えないものであると感じた。一方で、震災から9年の月日を経て、人々の生活が改善された部分や福島で暮らす人々の温かさ、新鮮でおいしい魚介類など、ポジティブな一面に触れることもできた。こうした経験を経て私にできることは、今まで以上に復興への取り組みやそこに住む人々について知り、発信していくことではないかと思う。ありのままの福島の様子を多くの人に知ってもらい、関心を持ってもらうことが福島から離れた地にいる私にとって、復興のためにできることであると考えた。これからも福島、震災に関心を持ってできることを考えていきたい。



大平山から海岸沿いを見た風景

阿部 更紗
(経済学部 現代経済学科 2年次生)

私が福島スタディツアーに参加した理由は、震災を風化させないための一員になりたいという気持ちと、今後また災害が起きたときに少しでも役に立ちたいと思ったからです。

1番記憶に残っているのは、バスで帰還困難区域を走っている間に見た景色です。道路脇には真っ黒なフレコンバッグが積まれ、全ての道が「帰還困難区域」と書かれた看板とバリケードで封鎖されていました。放置されたままの家々には生活のあとがそのまま残っていました。メディアでは、まるで大部分で復興が着実に進んでいるかのような報道もなされますが、人が戻れない町、山積みフレコンバッグ、枯れ草だらけの海岸などの景色を見て、私は東北が復興しているとは思えませんでした。

今回のツアーで、「現地に足を運び、自分の目で見て、話を聞くこと」の重要性を改めて感じました。

ツアーを通して得たもの・感じたことを忘れず、これからも時間をかけて学びつづけていきます。これまでの学生生活で1番、考えさせられ、心を動かされ、モヤモヤの消えない、自分にとって非常に意味のある体験になりました。



バリケードで封鎖された浪江町立津島小学校へ続く道

今井 杏
(経済学部 国際経済学科 2年次生)

私が、初めて福島県を訪れて考えたことは2つあります。

まず1つ目は、震災はまだ終わっていないということです。仮置き場に積まれているフレコンバッグや帰還困難区域の景色は震災当時からまるで時間が進んでいないように感じました。震災から9年たちましたが、まだ残されている課題が多くあることを学びました。

次に、2つ目は無知の怖さです。原子力発電所が建設された背景など知り、ただ大きい震災が起こったから仕方が無いということでは済まされない問題であると思いました。私も選挙権を持つ一人としていつ加害者側になってもおかしくありません。ただメディアやSNSの情報を鵜呑みにするだけではなく、真実を理解しようする姿勢が必要です。

福島県の復興が一日でも早く進むよう、実際に現地を訪れ感じたことを、身近な人々に伝えていきたいです。そして、同じような悲劇を生まないよう務めることが残された私たちの使命ではないのでしょうか。



バスの中から見た、「震災を乗り越えて復興」の文字。力強いメッセージであった

西垣 柚依
(経済学部 国際経済学科 2年次生)

この福島スタディツアーにおいて、印象に残った

場所がある。福島の浪江町という津波をもろに受けた元港町である。町を一望できる大平山に登ると、時が進んでいると感じる漁港と、震災直後と錯覚するような荒れ地が一緒になっており、パラレルワールドに放り出された感覚になった。

このスタディツアーではいろんな場所に行き、いろんな立場の方の話を聴いた。同じ県の中でも住む地区によって、自身の立ち位置によって全く意見が違った。同じ場所でも時間軸が異なる、それぞれの意見に整合性が無い、という状況で、情報が整理できなかった。

しかし、被災者の方の話を聴く中で、スタディツアーで話してくれた方々は、自身の立場から感じた被害について、私達にヒントを伝えてくれたのではないだろうか。そう仮定し、この方の話はどのような



阿部農園に埋められていた汚染土

なヒントになるのだろうかということを考えて話を聴くことで、ただ話を体験談として聴くのと違った視点で話を聴くことが出来た。

濱田 葵

(文学部 臨床心理学科 1 年次生)

私は今回初めて福島に行くことが出来ました。このツアーを通して震災から9年経った今でも知られていないことが多くあることを実感しました。4日間で様々な立場の方からお話を聴くことができ、福島の震災当時の状況や現状を知って、今まで同じ日本で起きていた事について、大切な事を何も知らずに過ごしていた事に気付きました。

私が特に考えさせられたことは、復興という言葉についてです。通る道路のすぐ側には、除染で出た土を詰め込んだフレコンバッグがたくさん並んでいたり、放射線を測る測定器が所々に置かれていたり、それらが無くならないと復興が終わることにはならないのかなと思いました。しかし、フレコンバッグの処理がいつ終わるのかは決まっていない現状と原発の中でも作業が行われている状況の中でも、港町や町の所々では復興が少しずつ進んでいて、これからどのように変わっていくのか自分の目で見て感じていきたいと思いました。

実際に福島に行く事では感じられない、自分



小高区に行った際に見かけた駅の前に置かれている放射線を測る測定器

の目で見た国道6号線からの光景や浪江町の海の景色など、初めて知った事故の詳細、福島の現状、私を感じた福島の良いところなどを身近な人に伝えていけるになりたいです。そして、自分自身の福島や震災・原発事故についての知識をもっと深めたいです。

早川 歩伽

(文学部 臨床心理学科 1 年次生)

私がこのツアーに参加したのは、被災地の今を自分自身の目で見て、現地の方々の生の声を聞きたいと考えたからである。初めて訪れた福島県では、9年たった今でも震災の爪痕が色濃く残っていた。

津波の被害を受けた地域を目の前にした時はどこまでも広い田畑が広がる光景に言葉を失った。福島県は地震、津波の被害だけで無く原発による影響も受け、まだ今も帰還困難区域がある。様々な場所で目にした汚染土を入れた土のう袋はその数に恐怖すら感じた。

今回私が目にした被災地は至る所で様々な工事が行われており、復興に向かって進んでいると



津波の被害を受けた福島県南相馬市鹿島地区

感じられたが、その一方でまだまだ沢山の課題がある。このツアーでは沢山の被災者の方々から貴重なお話をお聴きし、自分の無知さを痛感した。このツアーを通して、私がこれからできることは聴いたこと、見たこと、学んだことを自分の周囲の人々に伝えるということであると考えている。

石井 翔大

(法学部 法律学科 1 年次生)

私が今回の福島スタディツアーで印象に残っていることは3つある。



NPO 法人うつくしまランチさんに震災当時についてのお話をしてもらっている

1 つ目はうつくしまランチの渡辺氏が言っていた「無知は罪である」ということだ。渡辺氏は震災当時福島市に住んでいたが、避難しなかったそうだ。しかし当時、今の知識があれば必ず逃げたと言っていた。自分も災害

が起きた時に情報不足で後悔しないようにいろんな情報に目を向けようと感じさせてくれた。

2 つ目はデイさぼーとぴーなっつの青田氏のお話だ。その中で「てんでんこ」という言葉が出てきた。その言葉を私の理解している意味と違う意味として青田氏は理解していた。このことに気づき、自分の知っている情報が全て正確であるとは限らないということを感じることができた。

3 つ目は小高ワーカーズベースの和田氏のお話だ。課題が山積みしていることを課題解決ビジネスや研究のネタが豊富と捉えていらっしやった。このように自分の頭を柔らかくしてくれる例を挙げてくれて、自分の考えに固執しすぎるのもよくないなと思えた瞬間だった。

この福島スタディツアーで学んだことを意識して日々の活動に生かしていこうと強く感じた。

朝野 健太

(社会学部 現代福祉学科 1 年次生)

今回福島スタディツアーに参加して、現地の方の様々な思いを知ることができた。

私は話を聞く中で「復興とは何か」について改めて考えた。原発事故によって避難していた人が地元に戻ってこれることができれば復興なのか、倒壊した建物が再建されたら復興となるのか、人によって復興の定義は違ってくると思う。そんな中で思い思いの復興に向かって進んでいく姿を知り、福島の人の強さを学んだ。

県内をバスで移動していると汚染された土砂が入っている黒いフレコンバッグという袋が山のように積み重なっている場所が多く見られた。山積みになりどこで最終処分をするのかも決まっておらず、ただ置かれているだけだった。私にはあの黒い袋が人々を寄せつけず、苦しめているようにも見えた。

このスタディツアーからは学ぶことや考えさせ



震災当時のままの請戸小学校。体育館の床がへこむなど、震災の悲惨さを物語っている

られることが多かった
ので、ぜひ来年も参加して前年との比較、被災者の心境の変化などを知りたいと感じた。

稲岡 和穂

(農学部 食品栄養学科 1 年次生)

ツアー前の福島のイメージは、9 年も経っているからそこまで震災の跡は残っていないだろうと思っていた。でも、実際はそうでなかった。建物ひとつない荒れ地には伸びきった雑草とフレコンバッグの山。道ですれ違うのは 2 台に 1 台がトラック等の工事用車両。半壊したままの建物。何の変哲もない建物の前に置かれた立ち入り禁止の柵。そんな場所が

あった。震災はまだ終わっていなかった。でも、新しい堤防や建物も建設されており、着実に復興していることも見て取れた。



ごく普通の建物の前に設置されている立ち入り禁止の柵

とあってしまっている部分もある。だからこそ、この経験を生かして知らないことに興味を持ち知っていく。そして、将来に役立てていきたい。今回福島の方々からたくさんのことを学び、とても良い経験になったと思う。

岸野 洋祐

(農学部 食料農業システム学科 1 年次生)

街並みを見ると、国道 6 号線はきれいに整備されているものの、道路の脇には原発事故で汚染された土が入っているフレコンバッグといわれるものが大量に置かれ、それらを一時的に保存する中間貯蔵施設に向かうトラックや、被災したお店や住宅がその当時のまま放置されていた。本当に自分の住んでいる日本かどうか疑うもので、「ここには居たくない、早くここから立ち去りたい」という感情が沸いた。

南相馬市を視察する際にガイドさんから、黒いガードレールは津波で壊され建て替えられた表示と聞き、高台である場所も黒いガードレールになっているのを見て改めて恐ろしさを感じた。それと同時に、震災当時は 1000 年に 1 度の想定外の大災害であり、防災意識や危機管理能力が今ほどではなかったのは当たり前だが、今後 30 年以内に南海トラフ地震は起こるとされている今、3.11 の教訓や一人一人が防災意識を持たなければならないと強く感じた。



津波に流され建て替えられた際にあえて黒色にしている

実際に目で見て肌で感じた福島は良い意味でも悪い意味でも想像とは全く違うものだった。映像で見るよりはるかに震災の恐ろしさを痛感した。それでも私の中ではどこかまだ人ごとで自分は大丈夫だ

と思ってしまう部分もある。だからこそ、この経験を生かして知らないことに興味を持ち知っていく。そして、将来に役立てていきたい。今回福島の方々からたくさんのことを学び、とても良い経験になったと思う。

そして、東京オリンピックや大阪万博の開催などもあり、東日本大震災は年々忘れ去られている。だからこそ、いい経験だったで終わらせるのではなく、多くの人に今回経験したことを伝えていきたいと思う。